

2022年6月18日 自然を語る会

『沈黙の春』第1章 明日のための寓話

場所：zoom+飯田橋ボランティアセンター

参加：15名

自然を語る会では今年は『沈黙の春』を讀んでいこうということになっています。ただし、普通に読むのではなく、現代の我々の生活と照らしあわせて讀んでいこうということになりました。

第1章は、美しい自然があった村で、ある時急にその自然が失われていった、なぜだろう・・・というテーマです。我々も昔は普通に見られていたのに最近は何も見ることがなくなってきたものについて挙げていきました。

手賀沼では池に何かを投げ入れるとパーッと一面の水鳥が飛び立っていたが、今はそのような一面の水鳥はいなくなった。スズメも少なくなった、ヨモギ団子を作ろうと思ったがヨモギが無かった・・・

そして以下のような意見が出て、深く考えさせられました。

☆今の子ども達は昔の自然の様子を知らないで、今の貧しくなっている自然を、これが普通だと思って何も感じなくなってしまうのではないだろうか。

☆子どもの頃は雑木林の中で思う存分遊んだし、擦り傷もいっぱい作った。その時親は全く関与せず、全部自分たちで考えて遊んだ。今の子どもたちにはそういう自分たちだけで遊ぶことがなくなっているのではないか。

☆子ども達に体験させ、自然が楽しいと思って貰わないと自然を保護しようという気持ちが出てこない。次世代にバトンタッチしていくことは自然の美しさを知っている我々の責任ではないか。

☆裏の斜面を個人的に整備している、アマドコロやスマレが咲き始めたし虫も蜂も戻ってきた。

☆気仙沼で、植林活動に参加している、毎年1500人くらい来て、苗を植える。自然を回復させるということは難しいけれど、一步一步進むことが大切ではないか。

(文責 小川)